

般若波羅蜜 (智慧)

般若は仏の母

六波羅蜜もだんだん進みまして、遂に第六般若波羅蜜に至りました。布施、持戒、忍辱、精進、禪定の前五波羅蜜、一つとして、到彼岸、即ち彼岸の悟りの世界に至るためにはなくてはならぬ道でありますけれども、これより述べます般若波羅蜜こそは、六波羅蜜全体の根本になるものであります。若し般若が得られなければ、六波羅蜜全てが成立しないのであります。

ですから、大智度論三十四には、

「般若波羅蜜は、是れ諸仏の母なり、父母の中母の功最も重し。是故に般若を以て母とす。」とあり、

又同百には、

「般若波羅蜜は是れ諸仏の母なり。諸仏は法を以て師となす。法とは即ちこれ般若波羅蜜なり。若し師在り、母存せば名けて、失利となさず。」

とあります。誠に般若こそは、一切諸仏、菩薩を生ぜしむる母であり、師であります。

般若とは

般若とは如何なる義でありましょうか。大智度論四十三には、

「般若とは、秦には智慧という。一切諸智の中第一となす。無上、無比、無等にしめて更に勝れたるものなし。」とあります、

又同二十九には、

「諸の菩薩、初発心より一切種智を求む。其の中間に於いて、諸法の実相を知る慧、是れ般若波羅蜜なり。」とあります。

以上の中、第一文は、般若を「智慧」と釈してあります。般若とは智慧であります。即ち仏の絶対智のことです。一切の諸の智慧の智慧、即ち第一であつて、無上、無比、無等の絶対智であります。これを又一切種智とも言うのであります。

然るに第二文では、一切の菩薩が発心して、この一切種智を得て仏になろうとするに当たつて、その中間に於いて、諸法の実相を知る「慧」を般若波羅蜜と言われるとあります。そこで般若とは、正覚成就の仏智と、正覚成就せんとする菩薩の智慧とを総称して、般若と言われるのであります。

般若は誠に六波羅蜜中の王座であるばかりでなく、仏教全体が、般若に統一されると言つても差し支えありません。でありますから、一切経中には、この般若を説けるものが随分沢山あります。中でも彼の「大般若経」は六百卷ありまして、その全てが般若、智慧、空観と言つたことを説いてるのであります。私どもは、この六百卷を開いただけで度肝をぬかれてしまいます。この大般若六百卷を、縮小して、その要点を目錄のようにしたものが、例の「般若心経」であります。これは又一切経中一番短いものであります。この外に猶、般若部の經典は沢山ありますが、唯に般若部のみ

ならず、一切經典中、この般若の意義が含まれていない経はあり得ません。智慧をばなれては仏教はあり得ないからであります。

随つて、無辺広大深甚なる意義を撰している般若の何たるかを僅かの紙面に全て盡すは不可能であります。以下僅かに述べることに致します。

三般若

般若には幾種もの分類がありますが、先ず三般若について述べます。三般若というのは、一切種智、即ち如来の正覚に具有する三徳を顕したものであります。

一に、実相般若

二に、觀照般若

三に、方便般若

以上の中、第一の実相般若とは、般若の理体りたいであります。般若の理体とは、本来衆生が具しておつて、しかも決して煩惱虚妄に染まざる般若の実相であります。即ち土に埋もれた金剛石の如く、衆生にあつて滅せず、如来にあつて増さぬ真如まにょそれ自身をいふのであります。これ即ち所証さくしやうの理体りたいであります。証さくしやうると言へば、能証さくしやうと、所証さくしやうとなくはなりません。所証の理体を実相般若といふのであります。

次に觀照般若とは、さきの実相般若を觀照する実智、即ち修行によつて、智慧が磨かれきりますと、実相を觀照することが出来ます。これを実智とも言います。即ち自利の智慧、自分自身を救う所の智慧であります。実相般若があつても、この觀照般若が成就せねばなりませんし、実智を成就しようとしても、本来の真如実相がなければ、觀照般若は成立しません。

大乘起信論の言葉で言へば、実相般若は、本覚であり、觀照般若は始覚であります。始覚修行がとことん迄進んだ境地即ち、究竟覺に至りますと、本覚と一致します。ここに仏の自覚が成就するのであります。

さて、第三の方便般若とは、これを又權智ともいわれ、一切諸法を分別する智慧で、自利の実智が、利他の智、即ち衆生済度の利他の慈悲となつて現れたのが方便智であります。自利の実智は、必ず利他の權智ごんちを具もひ、利他の權智は、自利の実智によつて發揮せられるのであります。以上の実相般若、觀照般若、方便般若は、仏果の覺の三徳であります。

大智度論には、般若を実慧と方便智とに區別されてあります。実慧とは実智のことです。先の觀照般若のことです。方便智はさきに説く通り、衆生済度の權智のことです。大智度論に曰く、

「要を取つて之を言へば、諸法実相、これを般若波羅蜜といふのである。然らば何故に一切世俗の經書、及び九十六種の外道、小乗等にも諸法実相を説いているのに、般若波羅蜜と名けないのであるか。答えて曰く、世俗の經書は、国を安んずるとか、家を全うするとか、身命壽樂の爲とかのもので、未だ実ではない。外道の出家は、邪見の法に墮して実に非ず、声聞等、四諦を知り、無常苦、空、無我等を知つて、諸法実相を觀じはしても、智慧具足せず、一切衆生を利することができない。一切衆

生の為にすること能わずば、仏法を得ると為さず、実智慧ありといえども般若波羅蜜とは名づけけない。」

とあります。即ち、般若波羅蜜とは、真実智慧による、自利、利他成就の世界であることが明らかに出来てあります。自ら智慧によって涅槃に至ると共に、迷える一切衆生をして、涅槃に至らしめるのが、仏、菩薩の智慧であります。

智慧と無明

仏教においては、生死流転の根本を、無明と言います。無明を痴、又は惑とも言います。この根本無明の惑が、迷いの根本となり、心識となつて発動します。それが身の業をつくり、業には、苦を俱います。苦しみに又更に惑が働き業を深め、苦を増すかくして、惑、業、苦、惑、業、苦、と涯なく輪廻してやむ時がないのであります。衆生とは実に、この惑、業、苦の一塊にすぎないのであります。

無明とは、智慧なき相であつて、実体があるものではありませんが、真理にたいして盲目であることがやがて、妄念妄想となり、煩惱となり苦となるのであります。貪欲、瞋恚、愚痴の三毒の煩惱も、それらの根本となる、我見、我執も、智慧の眼をくらましている見惑、行動をやまらしている思惑も、その他、名前はいろいろのことなっています。一切のまよいの体も、相も、用も、すべて無明ならぬものはないのであります。しかも無明は無明それ自身すら見ることが出来ないであります。

釈尊は、世の生老病死にさめられて、一切を捨てて、生老病死を解脱しようと思はれました。生老病死とは、惑、業、苦の苦であります。即ち迷の果であります。難行3苦行六年の後、解脱の正因は、智慧にあることを悟られました。智慧によつて、生死流転の根本は、無明にあり、無明によつて、業を作り、業によつて肉体を受け、種々なる煩惱を造り、因をつくつて老死の果に至ることを順に逆に諦観して、衆生の迷いを明らかにし、やがて、一切の生死流転を解脱して、覺者となられたのであります。智慧光のみが、無明を無明と知り、迷いを迷いと知つて、生死無明を克服するのであります。

般若の智慧によらなければ、我等は、生死を出づることは出来ないであります。故に、般若の智慧が、六波羅蜜の最大一とせられるのであります。

凡智と仏智

引き続き、般若波羅蜜即ち智慧について述べます。

仏教は、智慧を開いて下さる教と言つてもいいほど、智慧を重んずるのであります。人間が自らの道にふみ迷うのも、生死流転を続けるのも、全て智慧の眼がとじているが故であるというのであります。されば仏教は智慧を尊ぶ。これが仏教の他の教と大変違う所であります。もつとも智慧と言つても、世によく「あの人は、智者だ、なかなか商売をよくやる」等という時の智慧は、真の智慧ではないのであります。この点から言えば、智慧を分別智と無分別智とに分けます。分別智とは人間凡夫の智慧であつて、あてになりません。分別する者は何時方角をかえるかわからないからであります。

仏智はこれを無分別智と言います。大悲と共なる智慧であつて、永遠に変わらぬ間違わぬ聖智であります。その聖智を又無智と言います。無智だと言つても世間いわゆる愚かなことではなくて真理はこれだとのつかむべき相がない、いわゆる一切皆空であつて無相でありますから、それを知る智も亦無智だというのであります。無智なるが故によく知らざるなしであります。凡夫の知れりとなすが如きは、妄念の所産にすぎないのであります。

更に有漏、無漏について、有漏智（凡夫）無漏智（仏智）とに別けることもありません。有漏とは「漏れること有り」で、眼、耳、鼻、舌、身の五官から常に煩惱を漏らすのが故であります。有漏智とは、この煩惱の混入し又は、煩惱のみの智であり、無漏智とは、少しも煩惱の混入しない純粹の智、即ち仏智のことでもあります。最高の菩薩は修行によつてこの無漏智を得ると言われます。我等は果たして如何にすればいいのでありますでしょうか。

三慧

智慧なくしては生活はありませんが、しからば如何にして得るのであるか、最初にあたつて示されるものが、即ち、聞、思、修の三慧であります。

聞慧とは、聞いて得る智慧であります。我等人間の世界では、聞くということが、最も大事であります。生まれおちるときから、色々なことを雑然と聞かされます。しかし聞いてはならぬこと、ためにならぬこと、統一も何もないことをぼんやりと聞いていたのでは、智慧は生まれません。そこで正しい教え、聖賢の教え、具体的に言えば経を聞かねばなりません。唯聞くことによつて知り得るのであります。聞くということなしに、独断することは恐るべきことでもあります。又幾千、万年の長い間かかつて、天才から天才と磨かれた伝統相承うけつたえを無視して、一人で考えることは損なことでもあります。次は、思慧であります。

思慧とは、思い考える事によつて得る智慧であります。如何に多く聞いても、耳から聞いて其のまま口に出す、耳口三寸の学問では食べたものを下痢すると同じく、血になり肉になりません。そこで聞いたことを唯、忘れず覚えておくだけでなく、よく咀嚼そしやくする事があります。「聞」が口に入れる事ならば、「思」はかむことでもあります。かんでかみこなしで呑みこみ我が実力とするのであります。

涅槃経に

「信に復二種あり、一には聞より生ず、二には思より生ず。是の人の信心は、聞より生じて、思より生ぜず。是の故に名けて信不具足となす。」

とあります。もちろんここでは「信」とありますが、信心は智慧でありますから、智慧についても同一のことが言われるのであります。我等は誠に聞かねばなりません。聞いて聞いてそれが、我等の思念の世界と完全に一致する時、真に聞いたと言われるのであります。

修慧とは、実践修行の智慧であります。聞と口に入れて、思と咀嚼して、遂に修と肉となり血となるのであります。即ち我等の生活の上に生きる事によつて得る智慧であつて最も尊重されるものであります。聞いて判つて、精神的には獲たつもりでも、

生活実践の上になると大概はもろくも無くなつてしまいます。そこで身にかけて修行し、それによつて得た智慧のみが真実だとも云えます。しかしそれも聞慧思慧が根底となつて成就するのであり、修慧によつて聞慧が生きているのであります。

この聞、思、修は唯に仏道の上のみならず、一般世間の何事も、これによつて成就するのであります。如何なる先天的賢者も、そのままにしておいては決して光を出しません。教えを聞き、自分で工夫修行して初めて、生得の才能を発揮するのであります。でありますから、思はあつても、聞くことが欠けたたり、聞きはしても、思を欠いたり、聞、思はあつても、修めることを欠いだりしたのでは、遂に真に自己を成就することは出来ない。まして大聖世尊のあとをつぎ、大いなる生命を継ぐとする者は、三千大千世界をもすぎゆくほどの熱意を以て、聞、思、修しなければなりません。こうして得る光こそ、智慧であります。而して智慧の光によつてのみ「法」はその人のものとなるのであります。

聖道より浄土へ

然るに我等はここに一つの疑問を持たざるを得ないのであります。それは先ず古来の聖者の態度であります。次には内省に於ける我等自身の自証であります。私の中には今、龍樹の大智度論百巻が開かれてあります。龍樹は仏教が生んだ最大の一の大黒柱であります。如何にも般若の空観を説こうとしてこの大智度論百巻を書かれました。然るに菩薩は、聖道難行道をすてて、実践的には、浄土門易行道をとつていられます。天親菩薩も亦千部の論師とて、大小乗にわたる大聖であります。然るに菩薩は遂に弥陀他力に帰していられます。この二大士より外は、一々例に引くまでもありません。

これらの聖賢たちは、何故に智慧第一を高調しつつ、遂には、無智をさとつて、浄土他力門に帰せられたのでありましょうか。

憶うに、真に無智なるは、無智者ということすら知らないであろう。智慧の世界は、それが開ければ、開けるだけ、無智を知るようになっていゝのではあるまいか。即ち、智慧の光が明かになればなるだけ、その自覚の天地においては、無智、愚痴の我を発見するように出てくるのであります。これは極めて不可思議に見えて、しかも靈界における常識であります。かの善導大師を以てして、「我等愚痴身」と叫ばしめ、聖者源空をして、「愚痴の法然房」と告白せしめ、親鸞聖人をして「愚禿」と名告らしめた如く、智慧の輝きは、我は智者なりと知らしめず、我は愚者なりと自証せしむるのでありましょう。

我等凡夫にして若し我慢傲慢に陥れば陥るだけ、自らを智者の如く、賢者の如く振る舞わしめるのであります。ここにおいて、智慧を必須の条件とする仏教においては、必ずここに、自覚における一大転換をよびおこすのであります。即ち、聖道より浄土へがそれでありまゝ。

聖道より浄土へ

続いて智慧について味わつて来ました。

智慧によらなければ、生死を度して彼岸に到ることは出来ないが故に、仏教においては、絶対の智見によって、第一義空をさとれと教え、生死即涅槃の証を説き、あるいは六度の行を提示します。然るに古来の聖賢は、何時しかかかる聖道門を捨て、最後には、浄土門に帰して念仏往生の人になられました。これおそらくは、智慧の世界は、それが開けて来れば来るだけ却って無智を知るようになっていっているのではあるまいか。龍樹、天親にして念仏に帰し、聖善導は「罪悪生死の凡夫」と告白せられ、法然上人は「愚痴の法然房」と言われた等、確かにかかる世界を物語っているのではあります。ここに智慧を必須の条件とする仏教においては、体験的にも実践的にも一大転換をよびおこすのであることを、前に述べておきました。

般若波羅蜜即ち智慧は、布施、持戒、忍辱、精進、禪定の前五波羅蜜を統一するものであります。であるから、智慧が真に成就するならば六度は必ず悉く成就するのみならず成仏の本懐を達することが出来るわけであります。

無上菩提を成就して仏になるには、必ず智慧の眼を開かなければならない。そこで本気になって智慧を得ようと勉強し修行するのでありますが、然れば果たして、智慧の眼を開くことが出来るでありましょうか。

然るに、不思議にも、古来の聖賢は、修行によって却って無智を知っています。愚かなる我を発見しております。そこに聖道より浄土への転回があるのであります。

仏智

しからば浄土門は如何に説くのであるか。

我々は自らの智慧を磨いて覚を開くのではない。如来の智慧によって救われるのであります。如来の智慧は、衆生に業苦あるが故に大慈悲と現れます。その如来の大慈悲は、光より暗へ、浄土より生死界へとはたらきかけて、衆生を救います。衆生は、唯慈悲によって罪悪煩惱のありつたけを救われるにとどまらず、更に仏の智慧はそのまま衆生の智慧となります。親鸞聖人が「智慧の念仏」と言い「信心の智慧」と言われたのはそのことでもあります。

大無量寿経には、阿弥陀如来の五智を説いてあります。五智とは、仏智、不思議智、不可称智、大乘廣智、無等無倫最上勝智であります。仏智とは、仏の智慧を総じていつたものであり、不思議智とは、仏智は、思いはからいをこえた智慧たることで、後の三智に対する総智であります。次の不可称智は、無量智しんたほつじょうといって、眞如法性の理は量をもつてはかることが出来ません。この広大なる眞理を証つた智を不可称智又は無量智というのであります。これは如来の自利の智慧であります。第四の大乗廣智とは、仏智は万有の差別の諸法すうがたをのこる処もなく知り給い、この廣智をもつて、一切衆生を残りなく乗せて彼岸に度らせ給うが故に、大乘廣智と言われるのであります。つまり、大乘廣智は、利他の俗智であります。第五の無等無倫最上勝智とは、二乗や菩薩にすぐれたるが故に無等であり、諸仏にすぐれたるが故に無倫であり、比べものなきが故に、最上勝智であります。かく一切にすぐれたるが故に、無等無倫最上勝智と言われますが、阿弥陀仏は一切衆生を、かかる覺りにまでひきあげずにはおかないとの仏智であります。以上の如き五智によって衆生は救われてゆくのであります。

阿彌陀仏の智慧は衆生においては信心となります。この信心の智慧によって、阿彌陀仏を信知し自己自身を知ります。

即ち、久遠劫来、無明煩惱を主の座に坐らせて、自覚するということのなかつたものが、仏智によって、罪悪生死の無明の相にさめる時、おどろくべし、南無阿彌陀仏は衆生の主の座に君臨し、煩惱は従の立場に転じて、その立場を失い、地獄一定と合掌し、罪悪深重、十悪五逆を諦観するのであります。之れ即ち真に仏智を得たるもの世界であります。

かくて浄土門を以てすれば、智慧はあくまで如来に属するものであつて、衆生はそれを廻向せられてやがて成仏するのであります。

法蔵菩薩——菩薩は、真如界より従果向因と顕現致します。如来より菩薩へ、浄土より生死界へと。真如の樂より來生した菩薩は、それ故に我が久遠のふるさとたる真如界を憶念します。これ即ち三昧であり、大寂定であります。般若の智慧によって、真如界を念じつつ、法を獲て自利成就して成仏せんとするのであります。しかし菩薩は、無限の苦惱の生死界に向かつて、大悲をおこしこれにむかつて利他成就します。これ即ち方便智、權智であります。

かく、真如界にむかつて成仏せんとするを、向上門と言い、生死界にむかつて利他成就せんとするを向下門と言います。或は上求菩提、下化衆生と言います。これ等は一般菩薩の誓願を言つたものでありますが、我等はこれを法蔵菩薩の上に拝むものであります。

法蔵菩薩の上にこれを拝むとは、やがてこれを南無阿彌陀仏の中に発見するのであります。衆生はこの如来の全てを領得して助けられるのであります。

結語

以上ざつと六波羅蜜について述べて来ましたが、これをまとめますと、

- 一、 布施。布施は利他の生活、慈悲を根底として、一切を挙げて与えることであり、物を、法を与えることから、我等日常の生活の全てが社会人類に対する布施でなくてはならない。
- 二、 持戒。規律、戒律を守り、悪を止め非を防ぎ、正しい生活を樹立すること。
- 三、 忍辱。苦にあたつて忍び生きること。
- 四、 精進。求道、修養全て善事に精進努力すること。
- 五、 禪定。浄土にかよう寂靜なところに住して、乱れぬこと。
- 六、 智慧。内に開く眼。

以上の六波羅蜜は、又南無阿彌陀仏の内容であります。法蔵菩薩はこの六度によって、長時修行成就して正覚を成就したと説かれます。即ち、六波羅蜜は六字の中にななる徳本であつて、我等が他力の大信に生きる時、六度を行じたと同価値を受け取り、不知不識の間にしこしづつ生活の中にひらめいて来ます。聖人は、大乘經典が説く一切の聖道のことごとく、法体、即ち、如来の中に帰してしまひ、原始の愚禿に目覚めて、一切を内含する南無阿彌陀仏にむかつて合掌されました。これ即ち人生の

帰結であり、求道精神の究極であります。今や六波羅蜜をおわるに当たって、我等は遂に浄土他力にその帰結を求めました。

「大乘菩薩道の提唱」と題してペンをもつてから、ここに、ひとまず終焉しゆうえんをつけるに当たって、私は、謹んで大乘菩薩道の至極、如来本願の大信海に生きさせて頂く身の至幸を憶うものであります。四聖諦八正道と言ひ、六度と言ひ、無我と言ひ、一切はやがて六字を通して我等のものと廻向せられるのであります。遂に残るものは唯合掌念仏の一道のみであります。

願以此功德 願わくばこの功德を以て

平等施一切 平等に一切に施し

同発菩提心 同じく菩提心を発して

往生安楽国 安楽国に往生せん